

「魔力供給ですか……？」

聞き慣れない単語で俺はつい聞き返してしまった。

しかし王はそれを気に求めることがなく更に続けた。

「魔王討伐軍隊長、ロイ。本日付でお前に特別任務を与える」

しんと静まり返る部屋の中、王の声がはつきりと

響いた。特別任務。魔王討伐軍隊長として軍を率いて一年あまり、まさか俺がそんなものを任されると

は思つてもいなかつた。

「はっ、なんなりとお申し付けください」

ら王は満足はしていなかつたらしい。

自然と背筋がピンと伸びる。どんな任務なのかと緊張して待つていると、王は驚くべき言葉を口にした。

「お前に勇者への魔力供給を頼みたい」

「なるほど、確かに魔法も使えるに越したことはありませんが、どのような方法なのでしょうか……？」

今まで人の魔力を増幅させる魔法はあつたが、

全くゼロの人間に分け与えるという方法はなかつ

たはづだ。

「どうやら、勇者限定の方法らしいが……魔力の高いものと性行為を行うことで魔力を分け与えることができるようだ」

「せ、性行為……？」

「ああ、古い古文書にそう記されていた。我々も半信半疑だが試して見る価値はあるだろう」

最近王が国中の学者を集めて、古文書を片っ端から読ませていたことは知っていた。何を調べているのだろうと思っていたが、まさかそんなことだったとは。

「それはどんなことを……」

「ははっ……口イ、お前だつて何も知らぬ子供ではないだろう。それに、お前にとつてこれは悪い話で

はないはずだが……？」

王は真っ直ぐ俺を見据えながらすべてを知っているかのような顔でそう問いかける。その様子から、俺の気持ちを知つてこのような提案をしていることは明白だった。

「しかし……それは勇者は納得するでしょか？」

「そんなものはしてもらうに決まつていいだろう。この国のためだ仕方あるまい」

たしかに戦争は終盤になり、戦況はこちらがやや押され気味なことは薄々感じていた。

「お前がこの国一番の魔法使いだから選ばれたんだ。それに勇者に少なからず気持ちを寄せていくことも。ただ……お前ができるないというのなら、他の男に頼むしかないだろうな」

「……そんなことはできません。でしたら俺が」
利用されていることはわかつっていた。しかし、頭で考えるよりも早く口が動いてしまう。

「そうか……お前が引き受けてくれて助かった。頼んだぞ」

そう言うとさつさと用事は終わつたと言わんばかりに王は家来に目配せをし、俺を部屋から追い出した。

◇ ◇ ◇ ◇

「なんだこの服つ……」

自室に帰ると俺が受け入れることをわかつていたかのように服と手袋が置かれていた。着替えて見ると、鏡の中に映るのは着飾つた自分。

「はあ……魔力供給係として性行為か……」

あいつとこんな形で体を重ねるなんて、手の中のロザリオを見つめながら初めてであつたときのことを思い出す。

◇ ◇ ◇ ◇

あの日はとても暑かつた。俺たちの住む村に新しい勇者となつた女の子がやつて来ることになつたとある夏の日。

朝から村は祭りかと思うほどの忙しさで、大人も子供も準備に村中を駆け回つており、俺はその様子を窓からただ眺めていた。

「勇者様を怖がらせてはいけない」

「村に化け物が居るなんて知られたら」

誰が言つたかわからぬ心配は次第に大きな声となり、俺のことを小さな倉庫に閉じ込めた。

この村での俺の扱いは散々だったし、お祝いの席

た。

「俺は人前に出ちゃいけないんだよ」

にはながら参加できるとは考えていなかつたが、で
きることなら、俺よりも幼いという勇者のこととはひ

「どうしていけないの？」

と田くらい見られたらとは思っていた。

ただ……そう思っていたのに。

「勇者様……そっちに言つては……！」

そう遠くで村長が叫ぶ声で田が覚めた。俺はどう

「それはっ……」

やらいつの間にか眠つてしまつていたようだつた。

何かあつたのかと起き上がるうとした瞬間勢いよ

げる！

く倉庫の扉が開いた。驚いてそちらに目を向けると、
そこに立つていたのは齡4～5歳ほどの女の子だ
つた。

「どうしてそんなところに居るの？」

「なんだよこれっ……いらないつて

まつすぐな瞳で見つめながら少女はそう口を開い

「そんなこと言わないで、気に入つたんでしょ？」

少女は次々と質問を繰り返す。なんだこいつは。
勇者だかなんだか知らないが偉そうな口を利きや
がつて、文句でも言い返してやるうと顔を上げる。

「ふふっ、やつと顔上げてくれた。ねえ……これあ

いきなり差し出されたのは丁寧な装飾が施されて
いるロザリオだった。俺は彼女の手の中でキラキラ
と輝くそのロザリオから田が離せなくなつた。

もうって

だろう。頼んだぞ。ロイ……

「俺がもらつても……」

「うーん、貴方とつてもきれいな瞳の色してるでしょ？　だからそれを見せてくれたお返し！」

幼かつた俺は、そう言って笑いかけてくれた少女の姿を今までずっと忘れることができなかつた。



「時間だ」

る。

その声に呼ばれて、部屋をあとにする。コンコン。
勇者の部屋をノックするが返事はない。帰ろうとしようとするも、一緒にやつてきた元老院のやつらはそれを許してはくれないようだ、

そして意を決して部屋に入ると勇者はベッドの上に座つていた。窓から差し込む光に照らされた彼女はあまりに美しく息を呑んでしまう。

「勇者、本当にいいのか？」

「気持ちよくすればするほど……送れる魔力は多くなるからな。ははっ、お前だって初めてではない

「うるさい……仕方ないでしょう。初めての相手すら国に決められるなんて思つても見なかつたけど

と下世話な笑みを浮かべて俺を見つめていた。何を言つているんだこのジジイたちはと、正直心底嫌気が差した。

勇者の瞳は俺を超えてどこか遠くを見つめていて、

なにかを諦めているように見えた。

「まあ……知らないおじさんよりはましだと思うわ」

その一言でわずかにでも抱いていた俺の希望は打ち砕かれる。もしかしたら、あいつも俺に好意があるんじゃないかな。体を重ねていううちに少しくらいはいい雰囲気になつたりするんじゃないかな。そんな事を考えていた俺と違つて、彼女はただ使命感でそこにあることがひしひしと伝わってきた。

「わかった」

短く返事をしてベッドに手をかける。

「早くして。魔王討伐軍隊長さん」

そう冷たく言い放たれた瞬間、俺の中で何かが弾

けた。ああ、そうか、もう俺たちはもう普通には戻れない。お互い愛し合うなんて無理だと俺の直感が

そう告げた。それなら俺がすべて我慢すればいい。

「ははっ……じゃあお望み通り、こっち向けよ」

……無理やり顎を持ち上げ、唇を重ねる。もう戻れない。そこからはただ無心だった。彼女の服を剥ぎ取るように脱がせ、首筋、胸元……それから腹を通つて、大事な部分まで全てに舌を這わせる。その間彼女は下唇を噛んで我慢していた。時折抵抗しようとすると、耳元で

「そうやって嫌がって言いわけ？ 魔力が使えないと」

いお前が悪いんだろつ……もっと感じてみろ！」

と囁くと彼女は一瞬悔しそうな顔をしたあと、諦めたように俺にされるがまま感じていた。

魔力供給 ショートストーリー
「あの日からずっと、届かぬ想い」

「はあはあっ……」のまま挿入するからなつ……」

「待つて、顔見られたくないから後ろ向きにしてつ」

そう言われ、後ろから自らのものを彼女の中に挿入

したとき、満足感とやるせなさ2つの気持ちが俺の
中で渦巻いた。

「はあはあっ……ほら声出せよ。お前が感じたほう

が魔力が送れるらしいから、我慢すんな」

頭では何をしているんだと思いつつ、腰の動きは
止まらない。そして……

「うつ……全部出すからなつ……受け止めろ！」

俺たちは目を合わせることもなく、行為を終了し

た。

「最後まで俺のこと見ないんだな」

「早く出でいって……」

そのまま布団を頭までかぶった彼女は、もう顔を見

せることはなかつた。諦めるように一瞥し、部屋を

あとにする。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ははっ……これじゃ、嫌われてしかないか」

廊下に出た瞬間乾いた笑いが口から溢れる。首か

らロザリオを取り出して、床に投げつけようとする
も、あと一步のところで出来なかつた。月明かりに
照らして見上げるとあの時と変わらずロザリオは
キラキラと輝いていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

その後聞いた話では、無事彼女は聖剣を使えるよ
うになり、王はたいそう満足したらしい。

「ロイ、早く準備をしろ」

魔力供給 ショートストーリー
「あの日からずっと、届かぬ想い」

きっと叶うことのない想いを胸に俺は今日もノッ
クする。

「勇者……時間だ」

今日も魔力供給の時間が始まる。

おわり